59

『難経集注』について

宮川　浩也，天野　陽介，小曽戸　洋，花輪　壽彦
北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】

『難経』の基準テキストとされている慶安五年刊本『難経集注』には，いくつかの不明点や錯誤が存在する．慶安5年刊本より古いと考えられる古鈔本『難経集注』（森立之旧蔵，以下古鈔本と略す）によって，その一部を検討したので報告する．なお，古鈔本書誌については既報した（「古抄本『難経集注』について」『季刊内経』167号，2007年）．

【検討】

〔1〕23難の「寸口人迎」

『難經』23難に①「朝於寸口人迎」，②「寸口人迎，陰陽之気，通於朝使」と，2ヵ所に「寸口人迎」の語がみえる．古鈔本はいずれも「寸口」2字に作り，「人迎」2字を欠く．

①に対しての，丁徳用注「復会於寸口人迎」，楊注「朝会於寸口人迎」と，いずれも「寸口人迎」に作る．②に対しての楊注も「亦見於寸口」と作る．この3つの注釈の「寸口人迎」を，古鈔本はいずれも「寸口」2字に作る．『難経』全体としては寸口脈診を提唱しているので，ここに「人迎」2字が存在するのは，解釈のしにくいところである．人迎については3通りの解釈がある．

1）滑伯仁『難経本義』は，人迎は足陽明胃経の人迎とする．

2）熊宗立『俗解八十一難経』は，人迎は伝写の誤りとする．

3）徐大椿『難経経釈』は，人迎は左手の寸口脉とする．これは『脈経』巻1脈法讃に「関前一分，人命之主，左為人迎，右為気口，神門決断，両在関後」にもとづくものと思われる．もし，人迎が左寸口をさすのであれば，巻1の丁徳用の脈診図に見え，また2難の丁徳用注にも「人之気口人迎左右神門」とみえる．

以上のことから，「寸口人迎」は丁徳用注本に基づいたのであり，古鈔本に「人迎」が無いのは，古いテキストである呂楊二注本に従ったものと考えられる．

〔二〕官名の比較

慶安五年刊本の官名に，

呂広・丁徳用・楊玄操・虞庶・楊康侯の注解，

王九思・王鼎象・石友諒・王惟一の校正附音釈，

とあって，従来は王九思・王鼎象・石友諒・王惟一それぞれの役割が不明確であった．

古鈔本には，

東京道人石友諒の音釈

呂広・丁徳用・楊玄操・虞庶・楊康侯の注解，

翰林医官殿中省尚薬奉御　王惟一の校正，

とあって，音釈を附録したのは石友諒であり，校正を担当したのが王惟一だとする．さらに，校正者に王九思・王鼎象二名の名前は出てこない．

王惟一（987?～1067）の「奉御校正」が，宋代の医書校刊を指すのであれば，天聖四（1027）年である．この時の校正とは呂楊二注本を指し，丁徳用注本の成立が嘉祐七（1063）年であるから，『難経集注』の五家注を編集・校正したのは王九思・王鼎象と思われる．音釈を附録した者が，石友諒と明記されているのも注意に値する．